

| | |
|---------|---|
| 氏名 | 岩本 真紀 |
| 学位の種類 | 博士(看護学) |
| 報告番号 | 甲第 56 号 |
| 学位記番号 | 看博第 15 号 |
| 学位授与年月日 | 平成 27 年 9 月 18 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 4 条第 1 項該当 |
| 論文題目 | 手術を受けた初発がんサバイバーのストレングスに関する研究 The Strengths of Primary Cancer Survivors Who Have Undergone Surgery |
| 論文審査委員 | 主査 教授 藤田 佐和(高知県立大学) 副査 教授 森下 利子(高知県立大学) 教授 内田 雅子(高知県立大学) 教授 池添 志乃(高知県立大学) |

論文内容の要旨

【研究目的】本研究は、手術を受けた初発がんサバイバーのストレングスを明らかにし、がんサバイバーの力に焦点をあてた看護援助の示唆を得ることを目的とした質的記述的研究である。

【研究方法】がんサバイバーの体験的世界から、社会的な相互作用の中でどのようなストレングスを持ち、発揮しているかを理解するために、象徴的相互作用論を理論的基盤とした。対象は、手術を受けた初発がんサバイバーで、再発・転移がない、同意が得られた 19 名であり、データ収集期間は 2013 年 2 月から 2014 年 3 月であった。データ収集は半構成的面接法を用い、木下（2003）が提唱する修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。倫理的配慮として、高知県立大学看護研究倫理審査委員会及び研究協力施設の倫理審査委員会の承認を得た。

【結果】手術を受けた初発がんサバイバーのストレングスとして、【自立して生きる力】【世界と調和する力】【変わらない元気さ】【がんに囚われない前向きさ】【限りある人生を大切にする信念】の 5 つのコアカテゴリーが生成された。また、【自立して生きる力】【世界と調和する力】を含む“自分を信頼して他者とともに生きる力”と【変わらない元気さ】【がんに囚われない前向きさ】【限りある人生を大切にする信念】を含む“自分の人生を拡張して生きる力”の 2 つの構成要素が見出された。

“自分を信頼して他者とともに生きる力”は、社会で様々な経験をする中で培ってきた力であり、誰にでも内在し、生きていく上で芯となる力である。がんと診断され、手術を受けることにより発揮され、がん経験の一部を他者と共有しながらも、がんを引き受ける力となっている。“自分の人生を拡張して生きる力”は、がんと診断され、手術を受ける中で培われた力であり、自分の死を現実のものとして認識しながらも、自分の命と真剣に向き合い、人生を大切に自分のために生きる力となっている。“自分を信頼して他者とともに生きる力”は、様々な経験を乗り越えることを助け、がんサバイバーの“自分の人生を拡張して生きる力”を生み出すことを促進する。また、“自分の人生を拡張して生きる力”は、自分の生き方を肯定することになり、“自分を信頼して他者とともに生きる力”を強化している。手術を受けた初発がんサバ

イバーは、内在しているストレングスを発揮させるとともに、新たなストレングスを生み出し、さらに自らのストレングスを強化している。

本研究の結果、手術を受けた初発がんサバイバーのストレングスは、これまでの生きてきた過程で培われた自分への信頼に基づく【自立して生きる力】と、豊かな繋がりの中で、この世界での居場所を獲得し、周囲と支え合うことのできる【世界と調和する力】である“自分を信頼して他者とともに生きる力”を基盤としている。そして、がん治療に伴う症状をマネジメントし、体調に合わせた生活を無理なく送ることにより実感できる、がん罹患する前と【変わらない元気さ】と、前向きな思考力と割り切る精神力で、がん罹患したことに伴う感情を切り替える【がんに関われない前向きさ】を原動力として、健康的で後悔のない生き方を志向する【限りある人生を大切にす信念】に基づく“自分の人生を拡張して生きる力”であることが明らかになった。

〔考察〕手術を受けた初発がんサバイバーは、ストレングスを発揮することにより、がんである現実に囚われず、自分の生き方を明確にし、生き活きと、健康的に自分の人生を送ることができていた。看護師は、がんサバイバーの捉えるがんの現実を理解した上で、“自分を信頼して他者とともに生きる力”と“自分の人生を拡張して生きる力”の支援が重要であることが示唆された。

審査結果の要旨

現代医療は、病院から在宅医療へと移行しており、専門職への依存ではなく自分で自分をコントロールする方向へと向かっている。しかし、手術を受けた初発がんサバイバーは、様々な問題を抱えたまま退院し、自分の力を活用することが難しい状況の中で試行錯誤しながら生活している現状がある。そのため、がんサバイバーが自らの力を最大限に発揮し、自らの力でQOLを高めていくための看護援助方法の開発が期待される。本研究の独創的な点は、手術を受けた初発がんサバイバーのストレングスに着眼し、問題解決的な関わり中心から、本人のもつ力に焦点を当てた関わりへとパラダイムシフトし、新たな視座での看護援助を探究したことである。

本研究では手術を受けた初発がんサバイバーのストレングスを明らかにするために、がんサバイバーの体験的世界から、社会的な相互作用の中でどのようなストレングスを持ち、発揮しているのかを象徴的相互作用論を理論的基盤としている。岩本氏は、研究者として手術後の厳しい状況にある患者に真摯に向き合い、半構成的面接法を用いて19名からデータ収集をし、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて語りを丁寧に分析し、結果を導いている。

研究の成果として、手術を受けた初発がんサバイバーのストレングスとして、【自立して生きる力】【世界と調和する力】【変わらない元気さ】【がんに関われない前向きさ】【限りある人生を大切にす信念】の5つのコアカテゴリーと“自分を信頼して他者とともに生きる力”と“自分の人生を拡張して生きる力”の2つの構成要素を見出し、ストレングスの全体像を明らかにしたと考える。手術を受けた初発がんサバイバーのストレングスは、これまでの生きてきた過程で培われた自分への信頼に基づく【自立して生きる力】と、豊かな繋がりの中で、この世界での居場所を獲得し、周囲と支え合うことのできる【世界と調和する力】である“自分を信頼して他者とともに生きる力”を基盤としている。そして、がん治療に伴う症状をマネジメントし、体調に合わせた生活を無理なく送ることにより実感できる、がん罹患する前と【変わら

ない元気さ】と、前向きな思考力と割り切る精神力で、がんに罹患したことに伴う感情を切り替える【がんに囚われない前向きさ】を原動力として、健康的で後悔のない生き方を志向する【限りある人生を大切にす信念】に基づく“自分の人生を拡張して生きる力”であることが明らかにし、新たな知見をもたらしたと考える。これらの成果は、がんサバイバーのもつ力についての知見を深化させ、臨床実践の場に、自分を信頼して他者とともに生きる力への支援と自分の人生を拡張して生きる力への支援という新たな看護援助方法を示唆するとともに手術を受けた初発がんサバイバーのストレングスモデルを開発する礎を築いたと評価できた。

以上のことから、本審査委員会は、博士論文審査基準に基づき提出論文を審査した結果、「手術を受けた初発がんサバイバーのストレングスに関する研究」は、研究テーマの着眼点、獨創性、研究へ着実な取り組み、丁寧な分析過程、論理的な論証による考察、研究成果の有効性と実践への発展性、がん看護学発展への学術的価値があると結論づけ、博士（看護学）の学位授与に値する研究成果であることを認めた。今後は、再発・転移を経験したがんサバイバーや、より大きな苦痛を抱えることが予測される時期にあるがんサバイバーのストレングスを明らかにし、研究を進展させていくことが期待される。